



<イベント案内>

■韓国弘益大学生がKEY 大阪に

○期間：2019年7月いっぱい



恒例の韓国弘益大学のインターンシップ生らが、これから1か月間 KEY 大阪の活動に参加します。7月6日には、インターンシップ生の教育プログラムの一環として、ちえっちゃんに来館。KEY の団体説明や活動の動機についてお話しする機会をいただきました。皆さん、積極的に交流し、これからも繋がれる友達になりましょう!!!

■(東洋大学社会学教授)金泰泳さん講演会「在日コリアンとメンタルヘルス」

○日時：2019年8月17日(土) 14:00～

○場所：KEY 大阪事務所

○参加費：無料。終了後は交流会(3000円ほど)

ヘイトスピーチや家族関係なので生きづらさを抱える在日コリアンの社会的背景や、支援のあり方(自助的活動)について考えます。

あまりかしこまった講演会ではなく、先生に、社会学の見地から、これまでのインタビューや研究から分析できることを分かりやすく話してもらった後、参加者の質疑応答のほか、実際の生きづらさについて、話せる範囲で共有する時間を持ちます。朝鮮半島にルーツのある青年限定の企画です。

<活動報告>

●ちえっちゃり「南北分断の歴史・現在・未来」(6/29)

この日、KEY メンバーを中心に、10人ほど集まり開催されました。朝鮮半島が南北分断国家になった最大のきっかけとなる朝鮮戦争について、どういう被害がもたらされたかについて学び、なぜ戦争が起こってしまったかについて、第2次世界大戦終戦直後から、米ソによる信託統治や南北単独選挙までに至るまでを、この日初めてこういった学習会を担当することになったちえっちゃりのスタッフから詳しく、丁寧な解説をしました。



その後、もう一人の担当から、DPRK がアメリカまで届く核弾道ミサイルを開発するまでに軍事力を高めていったかについて、特に90年代以降の話にポイントを絞って話しました。最後に、今年2月

にハノイで行われ、不調に終わった朝米首脳会談のポイント、朝米間、南北間にある課題点について共有し、この日の学習は終わりました。

この日は特に在日コリアンの参加が多かったため、在日コリアン同士であったり、日本人の参加者から南北統一についてや、朝鮮半島との距離感、アイデンティティについて、学習した内容からつながる形で活発な意見交換が行われたことが最もよかったと思います。



最後に、この日初めて学習会の提起者となったちえっちゃりスタッフの感想です。彼は数年前に渡日したニューカマーです。

「このイベントは私にとって、日本に来てからの最大な挑戦だったのを否定はできないと思います。母国語ではなく、外国語で2〜30分以上スピーチしないといけなかったところと、主題が歴史だったこと、もちろん、歴史には興味もあり、日本に来た以上はいつか勉強しないと、という思いはいつも持っていたので、このイベントはものすごく私に意味のある時間になったと思います。聞いてくれまして、そして一緒に共感ができて参加者達にはものすごく

感謝の気持ちを申し上げたいと思います。植民地時代から、朝鮮戦争及び民主化運動の過程を通して今の大韓民国が存在するのであり、このイベントで勉強になったのは私達は歴史のことちゃんと学ばなければいけず、今の私と一緒に生きてる在日韓国人、そして朝鮮人達がここに来たきっかけや背景などを学ばなければならないということを改めて思うようになりました、次にはもっと詳しく、そして、しっかり準備して一緒に勉強する時間を作ればと思います。初めて出会った人も多かったけど、いつかまた会いましょう。」

●済州4・3 若者の旅報告会(6/30)

6月30日(土)に若者たちの済州43の旅の報告会が開かれました。19名中12名が集まり、今回の旅で良かった事と改善点、各々で作成した旅の感想を発表し合いました。

実際に現場に足を運んで、国が本来護るはずの自国民の命を奪ったのはなぜかと感じた事、虐殺は過去の話でなく、1980年5月18日の光州事件でも繰り返された事、警察と軍隊がある限り現代でも起こりうる事、責任追及と同時に、虐殺に加担してしま



う人の心の動きについても研究が進められるべきだとの意見が出されました。

また、当時の現場を残し、伝えていく努力をしている済州島の方々の努力と前進に触れ、対照的に加害者としての歴史を残そうとしない日本の状況を述べる意見もありました。

そして、今回の旅では様々なルーツを持つ方々が集まりました。普段コリアンとしてのルーツを意識していなかったけれど、祖先は済州島事件に関わりかあったか調べたくなった感想や、同じ大阪人であっても出身が日本の地方か、植民地かで差別の有無が別れた、根強いコミュニティを持つ在日コリアン達を羨ましいと思う一方、加害者としての日本人の立場を忘れない様にしたい感想等、この度が自身のアイデンティティを問うきっかけになったという声もありました。